

聖書：マタイ 12：38～45

説教題：悪い姦淫の時代

日時：2019年6月23日（朝拝）

今日の箇所です。律法学者、パリサイ人のうちの何人かがイエス様のところに来てこう言います。「先生、あなたからしるしを見せていただきたい。」 「しるし」という部分にはアスタリスクがついていて、欄外の 38 を見ると、あるいは「証拠としての奇蹟」とあります。この彼らの要求は先週見た記事と関係します。先週は 22 節からの部分を読みました。そこではパリサイ人たちがイエス様のいやしのみわざを見て「悪霊どものかしらベルゼブルによって、そうしているのだ！」と言いました。イエス様はその主張は間違っていること、それは御霊を冒瀆する恐るべき罪に当たることを述べました。そして今日の箇所へ来るわけです。敵対者たちはここでなおも食い下がります。ではあなたがベルゼブルの力によってではなく、神の力によってそうしていることをもっとはっきり証明してほしい。誰もが沈黙して、これなら神によると認めざるを得ないようなはっきりした証拠としての奇蹟を見せてもらいたい。この後を見るとわかりますように、イエス様はこの要求にはお応えなさいません。それはそれができないからではなく、この要求に応じることは正しい在り方ではないからです。問題はイエス様がもっと奇蹟をして見せないことにあるわけではないからです。以下、イエス様の言葉を 3 つに分けて見て行きたいと思います。

一つ目の部分は 39～40 節です。イエス様はここでしるしを求めることは「悪い、姦淫の時代」の特徴だと言われます。私たちがまず心に留めたいことは、イエス様が神から遣わされたメシヤであることを示すしるしはこれまでたくさん与えられて来たことです。11 章 4～5 節でイエス様はこう言われました。「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツァラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。」 これらはいずれも旧約聖書で、やがて来られるメシヤが行うわざとして預言されていたことです。そのことがイエス様の周りで現実起こっています。目を良く見開いて見つめれば、この方は誰かという証拠はそこにはっきり示されていました。前回もイエス様は 28 節でこう言われました。「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」 目が開かれていれば、

そこにははっきり見て取れるしるしがあります。なのにパリサイ人らはそれらを心に留めず、もっと他のしるしを！もっと我々が納得するような奇跡を！と要求していた。これは悪い姦淫の時代のしるしだとイエス様は言っておられるのです。

この「姦淫」という言葉は旧約聖書からよく使われて来た言葉で、ここでは字義的な意味よりは霊的な姦淫という意味で使われています。旧約から神とイスラエルの関係は結婚関係にたとえられて来ました。その神との関係において、神を信じず、神に対して不忠実なことが姦淫と言われているわけです。そしてしるしを求めることはこれに当たるということです。実際の夫婦関係に当てはめて考えてみると分かりやすいかもしれません。夫と妻は結婚式の誓約に基づいて互いに信頼し合って生きるべきです。しかし片方の伴侶がもう片方の伴侶にいつもしるしを求めるようなことをしたらどうでしょうか。こんな状況になったら相手はどう動いてくれるか。また違った別の状況になったら私のためにどう行動してくれるか。時々その様子を陰でモニタリングするテレビ番組が放映されることがあります。そして相手が自分が期待したのとは違った行動を取ると、不誠実だ！浮気だ！と責めたり、あるいはその反対だと、やっぱり自分を愛してくれていると喜んだり、……。しかし特別な用もないのに、あえて相手にしるしを求めるのは、相手をいくらかでも疑う心があるからすることではないでしょうか。もし本当に信じていれば、そんなことをする必要はありません。しかし信じていない心もあるので相手を試す。相手を試すと言いながら、実は自分の側の信頼に問題があるわけです。イスラエルはこのようにして歴史の中で神を試し、神にしるしを求めるようなことをたびたびしました。そして自分の思う通りでないと、自分の願いを満たしてくれそうな他の神々へと心が向いて行った。まさに霊的姦淫です。またこのようにして相手にしるしを要求することは自分が上に立つことではないでしょうか。神との関係においても、しるしを要求するとは自分の方が神よりも上に来ることです。そうして私たちの言うことを聞いてくれる方が神なのではないでしょうか。神は私たちの気ままな願いにいちいち答えてご自分が神であることを証明しなければならぬ立場にあるのでしょうか。

聖書を見て分かることは、イエス様はしるしを要求されて、それに答えるようなことはなさらなかったということです。この福音書の4章で見た荒野の誘惑の記事でもそうでした。サタンから、石をパンに変えて神の子であることを証明してみせよ！とか、神殿の頂から飛び降りても守られる者であることを証明してみせよ！と言われても、そうしませんでした。その必要もないのに曲芸のようなことを行って自分の名誉を高めると

というようなことはされなかった。イエス様が特別な力を使われたのは人々の必要を満たすため、特にあわれみのわざのためです。自己中心的な目的や自慢のためではなく、ただ困っている人を助けるため、愛のみわざのために持てる力を注がれた。そこに神はどういうお方かを私たちは見るべきです。

イエス様は 39 節後半で「ただし、預言者ヨナの上は別です。」と言われました。これは何でしょうか。それは 40 節に説明されています。先ほど子どもにも分かりやすいお話で見ましたように、ヨナは三日間、魚の腹の中にいました。人間の間から消えて、まさに死んだような状態にありました。そして三日後にそこから出て来ました。これはイエス様の十字架の死と三日後の復活を指します。もし特別な奇跡を見たければ、その出来事を見るがいいとイエス様は言っているわけです。これはイエス様が例外的に彼らの要求に譲歩したということではありません。これもまた私たちのために神がしてくださったみわざです。イエス様はまさにこのことをするために来てくださいました。イエス様はそのことをここでも見つけておられます。そして確かにそこには驚くべき出来事が示される。奇しみわざを見たいというなら、それを見つめるように！とイエス様は言っているのです。そしてそこから神が発している重大なメッセージを良くくみ取るように！と促されたわけです。

イエス様の答えの 2 つ目の部分は 41 節と 42 節です。そこにニネベの人々が出て来ます。ヨナの話の続きです。ヨナ書 3 章に出て来ますが、ニネベの人々はヨナの説教を聞いて悔い改めます。その彼らがさばきの日にはこの時代の人々を罪ありとすると言います。これはどういうことでしょうか。ニネベの人々は異邦人です。その彼らでもヨナの説教を聞いて悔い改めました。彼のメッセージに応答しました。なのにイエス様の時代の人々は悔い改めない。しかも彼らの前にいるのは預言者ヨナにはるかに勝る方、メシヤ本人です。またその方がもたらしている神の国の現れがあります。にもかかわらず悔い改めないなら、ニネベの住民はやがてのさばきの日にあなたがたを責めることになる。一体あなたがたは何をやっているのか。これほどはっきりとしたメッセージが示されているのに、なぜ悔い改めないのかと。

もう一つ、42 節に出て来るのは南の女王です。列王記にシェバの女王として出て来る人です。彼女はソロモンの名声を伝え聞き、はるばるそれを確かめにエルサレムまでやって来ました。そしてそれが本当だったこと、自分が聞いていた以上であったことを知

り、神をたたえました。この彼女も異邦人です。その彼女も応答しました。それに対してイエス様の時代の人々は応答しません。わざわざ遠くから会うために旅する必要はないにもかかわらず。しかも目の前にいるのはソロモン以上の方です。ソロモンの知恵にはるかに勝る方とその方による祝福がここにもたらされています。なのに無応答。それには目をつぶって、もっと他のしるしを！などと要求している。そんなあなたがたを見て、南の女王はさばきの日にあなたがたを罪に定めると言われているわけです。

これは前に 11 章 20～24 節で見たメッセージと同じです。イエス様の時代の人々は、旧約時代のニネベの住民や南の女王よりもはるかに大きな恵みに接していました。その大きな恵みに応答しないなら、より大きなさばきを身に招くということです。彼らは自分たちの霊的無感覚、その不信仰を省みて、急いで悔い改めと信仰という応答に進む者でなければならないのです。

そして 3 つ目の部分は 43～45 節に記されている汚れた霊のたとえです。内容は難しくありません。汚れた霊がある人から出て行きます。それによってその人の状態は改善します。しかしその人がその家をそのままにしておくとうなるのでしょうか。汚れた霊は帰って来て、その家が空いていて、掃除してきちんと片付いているのを見ると、自分より悪い霊を 7 つ連れて来て、そこに住み着く。それによってその人の後の状態は一層ひどくなるということです。これは自分の家を空き家にしておくことの危険です。たとえイエス様のメッセージに接して一時的に良い状態を味わっても、無応答あるいは中立の状態にいるなら危険である。今しばらくは良くて、後で 7 つの悪霊が入って来て一層ひどい状態となる。

果たして私たちのイエス様に対する関係はどうでしょうか。最後にルカの福音書 16 章 31 節を参照したいと思います。金持ちと貧乏人ラザロのたとえ話の最後の部分になりますが、ハデスに落ちた金持ちが自分の愚かな生き方を悟り、せめて地上に生きている親族たちが自分と同じ生き方をしないようにラザロを遣わして警告してくださいと頼みます。死人が生き返って証言するという奇跡あるいはしるしが起こるなら、彼らも悔い改めるに違いありません。しかし 31 節でアブラハムはこう答えます。「モーセと預言者たちに耳を傾けないのなら、たとえ、だれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。」 「モーセと預言者たち」とは当時の聖書、旧約聖書のことで、つまり聖書があれば十分ということですね。これがあいながら、神に聞き従わない

なら、他にどんなしるしを見せられても彼らは信じない。神を知るためには聖書で十分である。さらに今日は旧約聖書に加えて新約聖書も私たちは手にしています。イエス・キリストにおいて成就した神の救いのメッセージについて、私たちは歴史全体を俯瞰しながらはるかに良く知ることのできる位置にあります。この神が与えて下さった特別啓示の書を脇に押しつけておいて、もっと他のしるしをください、証拠としての奇蹟を示してくださいなどと私たちは言うべきではないのです。

ですから私たちは神がくださった聖書の御言葉にこそ心を向け、これにまずしっかり聞き入りたいと思います。そして特にイエス様が見るがいいと言われたヨナのしるし、イエス様の十字架と復活の出来事に注目したい。罪のない神の御子なるイエス様が私たちの罪を背負って十字架上で死なれました。しかしその方を神は3日目によみがえらせて、この方に信頼するすべての者たちの罪を赦し、永遠のいのちに生かしてくださることを、この驚くべき奇跡においてははっきり示しておられます。そして大切なことは私たちは自分の心を空き家の状態にしておかないことです。そうではなく、神が遣わして下さったメシヤなるイエス様に住んでいただくこと。この方は29節で見たように、強い人サタンよりもさらに強いお方です。この方が私たちの心の家に住んでくだされば、もう7つの悪霊が戻って来ることを恐れる必要はありません。この方を迎え入れれば私たちの一生はもう安泰です。この方が私たちをこれからの生涯を守ってくださいます。この私をも神の国の祝福に生かし、やがての天の御国に至るまでの歩みを守り導いてくださいます。この祝福に私たちも歩む者とさせていただきたいのです。